

還來尾張國、

〔古事記傳二十七〕此段書紀には、蝦夷既平、自日高見國還之、西南歷常陸至甲斐國居于酒折宮云云。於是日本武尊曰、蝦夷凶首咸伏其辜、唯信濃國越國頗未從化、則自甲斐北轉歷武藏上野、西逮于碓日坂。時日本武尊每有顧弟橘媛之情、故登碓日嶺而東南望之、三歎曰、吾嬬者耶、故因號山東諸國曰吾嬬國也。於是分道遣吉備武彥於越國令監察其地形嶮易及人民順不、則日本武尊進入信濃とあり。此記と異なること多し、其差を論らはむに先其路次、此記の趣は蝦夷を意向て還坐、相模より足柄山を越て甲斐に到坐、其より信濃を經て尾張に還坐る國の次第皆よくかなへるを、書紀には「歷常陸至甲斐國」とありて、後に自甲斐北轉歷武藏上野、西逮于碓日坂云々、進入信濃とあるは路次順はず、其故は、常陸より甲斐に到る間には、武藏もあるいは相模もあらがたいから、歷常陸武藏などこそ云べけれ、但し常陸とのみ殊に云るは、御歌に其國の地名あるがためにてもあるべし、さて又甲斐より信濃へ行むに、武藏上野へ轉歷むは、路次いたく違へり、若武藏上野にも背ける者などありて、故に言向に幸るか、然らば其事を必云べし、云ずれば此は歷常陸武藏上野、西逮于碓日坂とありけむが、傳のまぎれて、前後は亂やあらむ。又右の如くにては、甲斐國に至り賜へることも何の由とも聞えず、此記の如きは、常信濃と路次なるを、書紀は然らざればなり、若右に云る如く、常陸、武藏、上野を歷て、碓日坂を越夜十日の日數少くて、あまり速なり、さて彼御歎ありし地も、足柄と碓日と傳の異なる、此は何れか正しからむ、決めかねつ。

七道

〔伊呂波字類抄見儀道〕ミチ、七道、東海道、東山道、南海道
〔西宮記四月〕一郡司讀奏

上卿目輔令讀、先讀畿内七道六十國銓擬大少領數、次讀道名、東海道ヒガシノカミチ又ウミヘツミヒウカシノヤマノミチ、東山道ヒタチノヤマノミチ又ノヤ
ノミチ、又東北陸道クガノミチ又キタノミチ、山陰道ミナミノウカケ止モノミチ、山陽道カゲトモノミチ、南海道ミナミノミチ、又ニミチ、次讀國名、○下